

## 特集に当って

山下 達哉

意思決定のあるところ、ORの実践がある。国際問題、国家・地方レベルの政策、社会的課題、企業経営、そして日常の暮しの場までその対象は広い。新しい理論面をひらき、その実地適用を試みる先駆的なものから、オーソドックスな手法を着実に用いるなかに、OR的なひらめきが生きるものまでその内容も多彩である。

顧りみると、ORの実践は、本学会設立当初からの理念であった。今回、ORの名が使われなくても、OR的思考法が地道に定着したとの考え方もできるし、あるいは、TQCブームのかけで実務家の眼をQCに奪われたとの感がないでもない。本学会創立25周年を期して、会員の声をききつつ2年前に策定された長期計画は、学会設立当時の理念に再立脚すべく、「ORの実学への回帰」をわれわれに呼びかけたことは記憶に新しい。会員のすぐれた業績に対して、毎年、贈呈される日本OR学会賞に、実施賞、普及賞、事例研究奨励賞が設けてあることは、この課題に対する本学会の姿勢を示すものである。また、本誌でも、毎号、事例研究を掲載することを念願としているが、必ずしも実現できたわけではなかった。しかし、会員諸氏のご協力をいただいて、最近、すぐれた事例研究をとりあげる数が増えてきた。現在、ご執筆いただいているものも数編ある。

最近では、パソコンの普及、OA、FAの進  
やました たつや 日本アイ・ビー・エム㈱

展、社会システムの定着など、各種の管理システムや手法、応用分野がひろがり、ORの対象分野もますます多彩になってきた。それだけ焦点がひろがり、ORそのものをさらにとらえがたいものになっている感がある。ここで重要性を増しつつあるのは、人間とシステムのかかわり合いが課題になりつつある現在、人間とシステムのインターフェースではなかるうか。

現実の課題は、必ずしも理論がすんなりと適用できる場ではなくて、そこにORの実践のむずかしさがある。このギャップをどう解決していくか、これがOR的な考え方であり、課題解決の1つの鍵であろう。そこに先人の経験があり、知恵がある。それを活かし、発展させることによって蓄積が増えてくる。テーマごとに、毎号、特集をくんできた本誌のやり方を変えて、こうした観点から今月号は事例研究の特集号とした。本年5月、小樽で開催された84年度春季研究発表会の研究発表のなかから、特定分野や手法に片寄らないように配慮しつつ、5人の方にご執筆いただいた。人間的面についての配慮なしにはうまくいかないシステムを扱った論文も含んでいる。

事例の対象と手法を幅広く求めたため、この他のすぐれたご発表についてご執筆いただけなかったことをお許しいただきたく、また、事例研究として、今後のご執筆をぜひ、ご考慮いただくようこの機会を借りてお願いしたい。あわせてご多忙中にもかかわらず、快くご執筆を引き受けていただいた各位に深く感謝する次第である。

OR的考え方とその実地適用について、先人の知恵のうえにさらにいくつかの石を積み重ね、会員の本課題に対する関心を高めるのに、本特集が役立つことを祈念しつつ。